

放送通訳の変遷と通訳・翻訳手法に関する考察 ～CNN二カ国語放送を例に～

稲生 衣代
(青山学院大学)

Broadcast Translation/Interpretation for CNN in Japan started in 1984. This paper describes three changes which occurred during the last two decades. At the very early stage, the requirement was to translate every word into Japanese. The second stage required interpreters: 1) to edit and translate the news material; and 2) to do voice overs like an announcer. The current, third stage requires simultaneous interpretation of all the materials in real time. Due to the demands from the production side, translating styles varied from time to time forcing the changes in the qualification of translators and interpreters, which lead to the birth of a new type of interpreters.

1. はじめに

現在、CNN (Cable News Network) 二カ国語放送が、イラク戦争や同時多発テロ事件で再び注目を集めている。これは湾岸戦争以来の現象である。CNN の二カ国語放送を手がけるのは日本ケーブルテレビジョン (JCTV) であり、NHK と並んで日本ではじめて「放送通訳」という新分野を開拓したと評されている。放送通訳という用語は多義的な概念であるが、本稿では、以下に論じるニュース等の全訳、時差通訳ならびに同時通訳の全てを含んだ概念であるとする。

放送通訳の現場では、完全同時通訳化が進んでいる。徐々に「通訳さん (通訳者)」に変わりつつあるものの、通訳者は主に「翻訳さん (翻訳者)」と呼ばれてきた。翻訳者という呼び名は、1984 年に CNN ニュースを日本語化する作業が開始された当時、ニュース素材を聞き取り、「全訳」つまり一語一句訳出するという限りなく翻訳に近い作業が中心だったことに由来する。

INO Kinuyo Yoshida, "A Brief History of Broadcast Interpreting and the Changes in the Style of Translation/Interpreting: A Case of CNN in Japan."

Interpretation Studies, No. 3, December 2003, pages 54-69.

(c) 2003 by the Japan Association for Interpretation Studies

NHK 衛星放送の二カ国語放送に関しては、これまで様々な側面からの研究がなされているが、CNN の二カ国語放送についてはほとんど考察されていなかった。放送通訳研究の中心となっている NHK 衛星放送の本放送が始まったのは 1989 年であるが、実は、それ以前の 1984 年から CNN の二カ国語放送が開始されていた。このため、CNN の二カ国語放送の変遷と種々の手法に関して考察することは意義があるものと考えられる。

CNN の二カ国語放送では時代と共に様々な要因が絡み合い、翻訳、時差通訳そして現在の同時通訳体制へと、およそ 3 つの段階を経て訳出手法が変わってきている。本稿では、20 年にわたる CNN 二カ国語放送の変遷過程を紐解き、各段階においてどのような訳出手法がとられてきたかについて分析する。

なお、本稿で扱う「CNN 二カ国語放送」とは、JCTV が手がける、英語から日本語に訳した放送を指す。NHK 衛星放送でも、CNN の二カ国語放送を行っているが、これは「CNN ヘッドライン・ニュース」を素材にしており、本稿で取り上げる JCTV の CNN とは異なる点には留意を要する。

2. CNN の概要と二カ国語放送開始の経緯

CNN 二カ国語放送について論じる前提として、CNN の概要、ならびに日本における二カ国語放送開始の経緯について素描しておく。

2.1 CNN の概要と位置づけ

CNN は、24 時間ニュースを放送するネットワークであり、現在 200 以上の国や地域で放送されている。2002 年末の視聴者世帯数は、米国を例にあげると約 8,600 万世帯とされる。CNN は、「CNN U.S.」「CNN インターナショナル」「CNN エアポート」など複数の放送チャンネルを持つ。ちなみに、NHK で放送されている「CNN ヘッドライン・ニュース」は CNN のチャンネルの中ではもっとも若い視聴者層を対象としており、チャンネルごとに特色がある。

米国で CNN の放送が始まったのは 1980 年である。多くの現場から中継が行われるという放送形態は、開始当初からの特徴であり、このような形態はテレビ史上初とも評されている。これに加えて、火山の大噴火、20 年ぶりといわれる巨大なハリケーンや共和党・民主党大会などの重大ニュースを放送開始直後から取り上げた。当初は CNN の頭文字をとって「チキン・ヌードル・ネットワーク」と揶揄されたこともあったが、放送を続けるにつれて徐々に評価を高めるようになった (Bibb 1996)。こうして、CNN は、1980 年代末には「ダース・ベイダー」の声で有名な俳優による声で “This is CNN, the world’s most important network.” (世界で一番重要なネットワーク CNN) といったナレーションを流すまでの自信をつけることとなった。

視聴者数は、戦争のような大きなニュースを契機に増加している。1990 年 8 月に、

イラクがクウェートに侵攻した段階で、CNN の視聴者は 100 万人を超えた。さらに、多国籍軍によるバグダッド空爆が始まると、米国大手ネットワーク局の数字には届かなかったものの、視聴者数は約 700 万人に増加した。国内向けに放送している米国大手ネットワーク局とは異なり、CNN の湾岸戦争報道は、世界中に配信されていたため各国で注目を集めることとなった。ワシントンのみならずロンドン、エルサレム、バグダッド、モスクワから各国の指導者が、CNN を通じてリアルタイムに戦争の様子を見守ったといわれる (Neuman 1996)。

こうして CNN の母国米国にあっても、CNN の重要性は認識されている。ワシントンやニューヨークの報道機関の編集者やプロデューサーでさえも、職場で「何かを見逃さないように」と一日中 CNN をつけたままとし、CNN の 24 時間放送に依存するという “CNN phenomenon” (CNN 現象) が起きているとの指摘もある (Walsh 1996)。米国における報道の現場では CNN が一種の BGM のように活用されているものと推察される。

またこのような「CNN 現象」には、“CNN effect” (CNN 効果) とも呼ばれるもう一つの側面も指摘されている (ただし、両者間の厳密な区別は難しい)。「CNN 効果」は、CNN が、報道機関だけではなく政府の外交政策にも影響を及ぼすのではないかと、いうものである。最近では CNN が外交政策の決定そのものに影響を与えるとは断定しえないまでも、政策決定プロセスに何らかの重要な影響を及ぼすものとみられている (Gilboa 2002)。CNN をはじめ、24 時間グローバルに伝えられるニュースにより、政府の意思決定までの時間が短縮化する傾向にある (Livingston 1997)。この点からも CNN などが注目されているのは確かである。

2.2 ニカ国語放送開始の経緯

日本における米国偏重は様々な分野で顕著にみられる。テレビ・ニュースもその例外でなく、日本の国際ニュースの約 1/3 がアメリカに関する報道とも言われている (クラウス 1995)。そのような状況を受け、日本の各局が米国メディアに注目してきた。過去には、たとえば TBS が米国 CBS の報道番組を、テレビ東京が NBC の報道番組を扱ってきたものの、現在のところ、地上波では米国メディアをそのまま冠にした番組はほとんど見られない。

CNN は日本に進出するにあたり、当初は NHK との間で交渉を進めようとしたものの進展をみなかった (天野 1996)。その後、英語放送を手がけていたテレビ朝日系列の JCTV と交渉を行い、日本への進出努力が実を結ぶこととなった。最近では、日本の新聞・テレビ報道でも「CNN によると…」と CNN を引用する記事・リポートが多数見られる。イラク戦争や同時多発テロ事件をはじめとする重大事件でもよく見られたところである。

2003 年 9 月現在、24 時間放送を続ける日本の CNN チャンネルでは、全番組の 7 割

以上（週合計 126 時間）について日本語への通訳が行われている。ニュース情報チャンネルにおいて世界最長の二カ国語放送を誇っており、CNN では日本語化作業が大がかりに行われている様子が窺われるところである。

3. 二カ国語放送の草創期～全訳時代（1984～1989 年）

以下の章では、日本で CNN の二カ国語放送がどのような変遷を遂げ、変遷に応じて放送通訳者がどのような技法を求められてきたかについて分析する。

3.1 放送翻訳の意義

1984 年 4 月、「おはよう CNN」「CNN デイウォッチ」という CNN を題材にした番組がテレビ朝日で放送開始された。CNN 二カ国語放送初期の時代には、原則としては、ニュース素材の映像を見ながら聞き取り、できる限りオリジナル（音声）に忠実に全訳する（“word for word”）ことが求められた。スペースシャトル「チャレンジャー」号の事故など、大事件、大事故や大災害などでは、例外的に同時通訳が行われた。1987 年には、若者などを対象とする娯楽性の強い番組である「CNN ヘッドライン」が開始された。

また、放送直前あるいは放送時間などで時間に制約がある場合、ニュースの要点を、いわゆるノートテイキングの手法を用いてメモの形式で短時間に訳出するほか、番組スタッフに素材テープの内容をウイスパリング（ニュースを聞いてそのまま囁くように同時通訳を行うこと）で伝えるという通訳的要素が強い仕事もあった。

以上のプロセスを定義づけるならば、「放送翻訳」ということができる。すなわち放送翻訳とは、オリジナル（音声）に忠実な、ニュースの全訳を中心とする概念であり、メモ形式の訳出ならびにウイスパリングの要素も併せ持つものである。これらは翻訳に利用可能な時間の長短に応じて適宜使い分けられたり、併用される場合がある（なお、本番に関わる者はプレーキング・ニュースと呼ばれる突発的に入ってくる速報の同時通訳も引き受けることになっていたが、主に翻訳業務に従事しているとみなされ、“翻訳さん”と総称されていた）。

以下、放送翻訳の具体的プロセスについて、「CNN デイウォッチ」ならびに「CNN ヘッドライン」を例にとって概観する。

3.1.1 CNN デイウォッチ

「CNN デイウォッチ」はこれまでにない報道番組として高い評価を受けたニュース番組である。初代キャスターの久和ひとみ氏（故人）が「アメリカ人による、アメリカ人のためのニュース」と評したように、日本人にはなじみのない内容のものが多かった。後述するようなプロセスを経て作られた米国メディアのリポートの日本語原稿を読み上げ、キャスターがそれに対してコメントするスタイルがとられていた。

1985年からはテレビ朝日の「ニュースステーション」にCNNコーナーが設けられ認知度が高まった。以下、作業プロセスにしたがって論じる。

a) ニュースの選択およびタイトル付け

まず、番組では基本的に24時間のCNNニュースからもっとも放送にふさわしい、視聴者にとって興味深いと考えられる題材を使用する。このため、AD（アシスタント・ディレクター）が一定の時間ごとにめぼしいニュースを選び出し、オリジナル・テープからリポート毎に別のテープへとダビングする。英語ニュースを聞いて理解できるADが担当した場合には、AD自身が項目のタイトルをつける（このタイトル一覧を「項目表」という）。一方、そうでないADが担当した場合には、翻訳者がテープを聞きながらウィスパリングもしくは逐次通訳で内容を伝え、ADが要旨を書き出してタイトルをつける場合と、翻訳者がテープを聞きながら要旨を書き出して自らタイトルをつける二通りの方法がある。

b) 訳出作業と使用するニュースの決定

その後、ADが選択したもののなかから、ADの説明を聞きつつ、ディレクターが放送する可能性の高いリポートを絞り込み、翻訳を依頼する。キャスターのリード（リポートの前ふり）部分が入っていないリポートの長さは3分前後であり、一人の翻訳者が1時間近くかけ、オリジナルに忠実になるよう心がけつつ全てを翻訳した。

c) 放送本番で利用する原稿作成（制作者サイド）

b)の作業を経てある程度の量のリポートが訳された後に、番組スタッフによる会議が開かれる。項目表をもとに、翻訳があるものはそれを見ながら、翻訳がないものはADからタイトルにしたがって内容説明を受け、使用するニュースが決められた。

翻訳をもとに、ディレクターやキャスターらが、映像との整合性をとると同時に日本人視聴者にわかりやすく伝える点に留意しつつ、ニュース原稿に書き換えた（この過程を「リライト」という）。

なお、ADは、上記の作業中であってもニュースが絶え間なく送られてくるというCNNの性格から、放送を見ながら使用される可能性がある最新のニュースを次々にダビングしていった。

d) モニタリング

本番時に突発事故や事件のブレイキング・ニュースが入ってくる可能性があるため、翻訳者（ここでは同時通訳者の役割を果たす）はスタジオ内で待機し、その時間に送られてくるニュースを中心にモニタリングしていた。

3.1.2 CNN ヘッドライン

「CNN ヘッドライン」は、1987年9月に開始されたもので、ニュース、スポーツならびにエンターテインメント関連という、より娯楽性の高い内容の番組であった。キャスターが伝えるにあたり、英語と日本語の両方を組み合わせた点が特徴である。このため、「バイリンガル」という流行語も生み出した。

10分足らずのこの番組では、主に他のCNN関連の番組用の翻訳を活用していた。全訳された翻訳文からキーワードなどを抜き取り、担当ディレクター（デスク）が短い原稿に書き換えていた。原稿は日本語を主とするものの、英語の文章も盛り込まれるため、番組のキャスターのみならずディレクターも英語と日本語の双方共に堪能であることが求められた。

番組には日替わりで特集コーナーがあった。例えば、ファッション特集の場合は、CNNの30分番組である「スタイル」からハイライトを3分程度に編集したりレポートを放送していた。ディレクターは、「CNN デイウォッチ」用の全訳（この全訳作業は、「CNN デイウォッチ」を制作するにあたり日常的に行われる作業とは別に行われていた）をもとに、読み原稿にリライトした。

また、もっぱら芸能界の著名人に対するインタビューを放送する「One on One」のコーナーでは、当初、CNNから入ってきたインタビュー番組の素材を使っていた。このため、翻訳はこの素材部分のみに対して行われた。

その後、「One on One」は来日した映画監督・俳優や歌手に直接取材する形式に変更された。取材した際のテープをそのまま全て訳出すると翻訳時間がかかりすぎるため、担当ディレクターが平均30分のテープを10数分程度に編集し、取材に利用した質問事項ならびに関連する資料をテープとともに翻訳者に渡した。翻訳者は、およそ3時間かけて翻訳し、ディレクターは、受領した翻訳をもとに、本番に使用する3分弱のテープにまとめた。

3.2 同時通訳の位置づけ

全訳時代における同時通訳の位置づけは、あくまで「例外」としてのものであった。

翻訳者が突発事故や事件のブレーキング・ニュースにそなえてモニタリングした点は、3.1.1のd)で論じたところであるが、実際に同時通訳が行われた具体的な例として、1986年1月のスペースシャトル「チャレンジャー」号の事故をあげることができる。この報道は、CNNが日本全土で注目を集める契機となったといわれている。

事故が「CNN デイウォッチ」の本番中に発生したため、この模様を同時通訳付きで生中継した。いったん番組が終了したものの、その後の番組編成が急遽変更され、1時間ほどして放送が再開、そのまま早朝まで約3時間の報道特別番組（報道特番）が続いた。ちなみに、この報道特番の際には1人の同時通訳者がおよそ1時間の本番と約3時間の特番を担当した。

このように、二カ国語放送の全訳時代には、大事故など緊急の状況あるいは重要な演説のみに同時通訳が行われた。

3.3 全訳時代における（放送）翻訳者に求められた技法と資質

全訳時代の翻訳の目的は、番組制作者に対してニュースの情報を正確に伝えることにあった。このため、放送翻訳者は、訳出されたニュースを日本語として自然に仕上げるといふよりも、むしろオリジナル（音声）に忠実な形で訳すという技法が求められた。この翻訳をもとに、番組ディレクターらが、視聴者向けにわかりやすい原稿に書き換えた。

訳出する際には、1980年代はインターネット普及前の時代であるため、放送翻訳者は、固有名詞などの不明な箇所をインターネットで調べたり、またスクリプトで確認したりすることもできなかった（現在は、CNNで放送される番組のトランスクリプトの一部をCNNのホームページから入手することが可能）。このため、背景知識の豊富さ、サウンドバイト（短く引用される発言）の細かい所まで聞き取るリスニング能力が、放送翻訳者の資質として重視されていた。

なお、CNN 二カ国語放送の現場でみられた日常的に音声聞いて大量の翻訳を進めるシステムは、日本では初めてではないかという指摘もある。

4. 二カ国語放送の発展期～時差通訳時代（1989～1998年）

3. では、地上波であるテレビ朝日で主に放送されているCNN関連番組の二カ国語放送について論じてきた。

一方、JCTVは、ケーブルテレビやCS放送向けにCNN専門チャンネルを手がけてきた。当初は、CNNを英語だけで放送してきたものの、英語放送だけのCNNだと視聴者になかなか受け入れられなかったため、日本人キャスターによる一日のニュースをまとめたダイジェスト番組が必要になった。こうして、1989年12月から日本で制作する二カ国語番組「CNN東京プライム」が始まった。

この番組の開始を契機に、CNN 二カ国語放送で時差通訳が主流となり始める。全訳時代にはCNN 二カ国語放送といえば、テレビ朝日の番組内で扱われるCNNを指したが、時差通訳時代以降はJCTVが放送業務を担当する24時間放送のCNN専門チャンネルを指す場合が多くなってきた。

なお、時差通訳時代ならびに後述する同時通訳時代に至っても、全訳時代と比較すると翻訳量が減ったとはいえ、テレビ朝日の番組向けに、全訳ならびに時差通訳も行われていることには留意する必要がある。

4.1 時差通訳の意義

CNN 二カ国語放送における時差通訳とは、通訳者がCNNの素材を一定の時間内に

日本語に訳出し、主に生放送の本番中もしくは放送前の収録時に、素材に合わせて「ボイス・オーバー」することをいうものと定義する。ボイス・オーバーとは、映像にあわせて原稿を読み上げることをさす。

当初は所定の翻訳用紙に時差通訳用の原稿を書いていたが、その後、データベース化して保存するという形式が主にとられるようになり、パソコンを使うようになった。通訳者が、ボイス・オーバー用の原稿をパソコン入力し、その原稿を保存するという手法である。一般に時差通訳の場合、通訳者によって、簡単なメモ取りで済ます方法から、「です・ます」などの文末も含めて細かく訳出し原稿化するという方法まで、訳出方法に段階がみられるが、どのような方法をとるかについては通訳者に裁量権が与えられている。自分の読みやすい形でボイス・オーバーに臨めば足りると考えられている。しかしながら CNN 二カ国語放送については、通訳者は、あくまでも他の人がそのまま読み上げられる原稿を作るように求められた。

4.2 時差通訳者に求められる技法

時差通訳者には 3 つの技法が求められる。第 1 に「編集」、第 2 に「情報の補足」、第 3 に「音声表現」である。順次論じる。

4.2.1 編集

時差通訳にかかわる通訳者は、これまで必要とされてきた通訳スキルに加えて、他の要件をも満たす必要がある。CNN 時差通訳の現場では「早口でまくしたてるとわかりにくくなってしまうため、要点をとらえ、多少内容が落ちていてもかまわないので、お茶の間で見ている視聴者にわかりやすいように訳すこと」と指示されてきた。

英語に対して日本語で一定時間以内に話せる情報量は 6~7 割と言われている（木佐 1993）。そもそも、そのまま忠実に訳出してもどうしても日本語訳の方が長くなってしまいうので、レポートの尺に収まりきらない。このため、日本特有とも言える時差通訳においては、素材に合わせて一般視聴者にわかる速度でボイス・オーバーをする特性上、どうしても編集することが不可欠であるものと考えられる。ただ、ここで気をつけなければならないのは、あまりにも簡略に訳しすぎて重要な情報が抜け落ちてしまうことであり、わかりやすさと必要にして十分な情報の提示という 2 つの要件の間の適切なバランスをとることがきわめて重要である。

したがって通訳者は、時差通訳を担当するにあたり全てを訳出できないため、自分の判断でオリジナルを編集するという「ニュース編集者」としての役割も担うことになる（鶴田 1997、三島・小倉 2000）。もっとも、本来通訳者に編集が認められているのかという点については議論のあるところである（ピンカートン 1996）。

4.2.2 情報の補足

3. で述べた草創期には、翻訳者が、訳にさらに注釈をつけて文化的背景を説明することがあった。たとえば、米国の高校生活を題材とするニュースを翻訳するにあたって、そこに出てくる **homecoming** や **prom** などあまりなじみのないキーワードについては、米国の事情にそれほど詳しくない制作ディレクターらが原稿を書きやすいようにという配慮から、内容について補足を行った。付加された情報をどこまで日本語原稿に盛り込むのかは、制作側の判断に任せた。一方、時差通訳の場合、原文をわかりやすくするために情報を補足する役目を通訳者が担うようになった。

4.2.3 音声表現

放送通訳をするにあたって、アナウンサー的要素が求められている点が会議通訳と比較すると大きな違いとしてあげることができる (Kurz 1990、貝瀬 1993、小倉・三島 1999)。

視聴者はアナウンサーが流ちょうに原稿を読み上げるのに慣れており、いかなる状況下で訳しているのかなど意識していない。たとえば会議通訳で同時通訳を聞く場合、わざわざ会場に足を運んだ聴衆は基本的にテーマに関心があり、ヘッドフォンをつけて積極的に聞こうという姿勢で通訳に耳を傾ける。一方、放送通訳では、一般的な視聴者は集中して聞くことはまれであり、会議通訳とは聞き手の状況が全く異なる。そのため放送通訳者は音声表現に相当配慮する必要がある。

日本人キャスターがニュースの説明 (リード) を読んでから、レポート部分を放送通訳者がボイス・オーバーするという手法がとられた「東京プライム」以降、CNN 二カ国語放送では、正確な訳出に加え、音声表現も重視される傾向になっていった。

例えば、芸能ニュースを扱う「ショウビズ・トゥデイ」の時差通訳者には、スターのインタビュー部分や映画のせりふを読む際には声音を変えること、また、リポーター部分については、軽妙なラジオ DJ 調で原稿を読むことが求められた。また、「ワールド・スポーツ」では特有な専門用語 (ジャーゴン) を駆使した訳に仕上げ、スポーツ・アナウンサー的な歯切れのよい読みを行うように求められた。

このような芸能やスポーツ・ニュースの時差通訳に関しては、通訳者がナレーター業務の領域に踏み込み、通訳本来の役割から逸脱しているのではないかという批判もあった。

テレビ関係者と会議参加者を対象とした「通訳者に期待する基準」調査によると、テレビ関係者側は「感じの良い声質」「流ちょうな話し方」「正しいアクセント」「正確な文法使用」を求めていることが明らかになっている (Kurz 1997)。通訳者が声の調子を変え、どこまでアナウンサーやナレーターの領域に踏み込むのかは一概に判断が難しいが、制作現場の声を聞く限り、「視聴者に一番わかりやすいように」という点が最優先課題であるとみられる。

JCTV ではテレビ朝日系のアナウンス・スクール参加を推奨し、また NHK では通訳

者向けのアナウンス研修や、同時通訳ブース（いわゆる同通ブース）説明会でマイクの使い方などについて技術者が指導する、といった事例からもわかるように、時差通訳に対して、アナウンサーに匹敵するほどのレベルの音声表現力を求めている様子が窺える。

5. ニカ国語放送の成熟期～同時通訳時代（1999年以降）

メディアにおいて同時通訳はこれまであまり多用されてこなかった（Viaggio 2001）。もちろん、アポロの月面着陸をはじめとして、これまで放送の世界において同時通訳が活用されてきた例もいくつかある。しかし、外国からのニュースに同時通訳をつけるのは、あくまでも大きな事故や事件が起きた場合に限られた。また、政治家やミュージシャン、スポーツ選手など、外国人ゲストがテレビに出演しインタビューする際に同時通訳がつく例が見られる。これは、日本特有の傾向ではなく、欧州本土でもかなり一般的である（Phelan 2001）。

CNN ニカ国語放送の時差通訳の次に訪れたのが同時通訳時代である。繰り返し論じたように、1989年以降は時差通訳が一般であり、1992年の米大統領選での党大会におけるブッシュ、クリントン両候補の指名受諾演説などが同時通訳されることはあったとはいえ、同時通訳そのものは例外的であった。しかしながら1998年12月末に日本で制作しCNNチャンネルで放送してきたCNNのダイジェスト番組「プライムトゥデイ」（旧題「東京プライム」）が終了し、時差通訳時代が幕を閉じることとなった。

以下に、同時通訳に移行した過程、同時通訳の内容と現状について順を追って論じる。

5.1 時差通訳から同時通訳体制への移行

「プライム・トゥデイ」の終わり頃からCNNニカ国語放送では時差通訳と共に徐々に同時通訳の併用が始まった。その時期には番組内容を損なわないニカ国語放送という点を重視していた。CNNニカ国語放送を手がけるJCTV側も「速報性が求められる生放送のニュース番組などは同時通訳で、それ以外のVTR番組などは時差通訳による音声吹き替えで対応。日本のメディアでは見落とされがちな、国際基準のニュースを判り易い日本語で」伝えるという立場を1998年頃まではとってきた。

CNNニカ国語放送では出来るだけ多くの視聴者を獲得し、他のチャンネルとの競争に勝つために、積極的にニカ国語放送を増加させる傾向が見られるようになってきた。1989年の「東京プライム」放送開始時には週に5時間、1992年には「ラリー・キング・ライブ」「ショウビズ・トゥデイ」「スタイル」などが加わり、週に合計12時間30分、1994年には放送枠が拡大され、18時間30分、1995年には30時間と着実に拡大することとなった。

ニカ国語放送の増加に伴い、CNNでは徐々に時差通訳から同時通訳体制へと移行

した。時差通訳の場合、例えば 30 分番組を 2 人から 3 人で 3 時間かけて訳出し、ボイス・オーバーした。同時通訳になると、2 人の通訳者がリアルタイムで 3 時間の放送分をそのまま担当出来る。また、同時通訳は時差通訳と比べれば、正確性やわかりやすさでは劣るが、速報性に勝る。ニュースを新鮮な状態で伝えるという利点がある。

そのような事情を背景に、1999 年 1 月からそれまで 30 分のニュース番組「ワールド・ニュース」を中心に午後 8 時から深夜 1 時までつけられていた同時通訳が朝 7 時から行われるようになり、二カ国語放送の時間が、1 週あたり合計 86 時間と、それまでの 2.2 倍に拡大した。

5.2 放送の同時通訳

大統領の一般教書スピーチなどの演説は、会議通訳の同時通訳の手法をそのまま用い、よどみなく訳出することは可能であり、実際、放送の世界では重要な演説には同時通訳が付けられてきた。また、対談の場合も余剰部分 (redundancy) があるため、同時通訳に向いている。一方、記者がかなりの時間をかけて丁寧に作り上げたりレポートは贅肉が全てそぎ取られた精度の高い内容となっており、そもそも削除する余地がない。時差通訳の場合は、その部分をうまく編集しレポートの尺に合致するように一定時間かけて原稿やメモにまとめる。それと比べてレポートを同時通訳する際は聞き取ったところからその作業を瞬時に進めるしかない。しかもワン・テーマ、たとえばイラク戦争や同時多発テロのみを扱う特別番組ならば、語彙も限られており、ある程度の予測をつけながら同時通訳も可能だが、通常のと時期に放送されている多数の項目が盛り込まれた 30 分ニュース番組の同時通訳は難易度が高い。

放送に同時通訳をつけ始めた当初は、いわゆる「5 W1H」に沿って事実を伝える「ストリート・ニュース」のみが同時通訳に適するものと考えられていた。しかしながら、1999 年 11 月以降、それまで同時通訳を行っていなかった「ワールド・ニュース」内の天気予報やスポーツ・ニュースにも同時通訳が追加された。

その後、さらに同時通訳体制が強化され、「ワールド・ニュース」以外の番組にも同時通訳をつけるようになった。現在は経済、スポーツ、芸能や、「ラリー・キング・ライブ」に代表されるトーク番組などすべて同時通訳で処理している。「速報性」と「効率性」が重視され、それに応じて、通訳者の負担もかなり増大している。聞き易さおよび正確性という点から考えれば、時差通訳と同時通訳を併用することが理想的と思われるが、現状を見る限り、CNN 二カ国語放送では同時通訳を中心とする体制が当面持続するものと推察される。

ただ、この速報性・効率性追求の流れは時代の流れでもあり、逆らえないのだろう。CNN と同様に、1994 年から放送を開始した BBC ワールドもまた同じ状況に直面している。BBC でも二カ国語放送時間の拡大に伴い、年々 1 人の通訳者が担当する訳の分量が増加の傾向にある (柴原 2003)。この点は CNN と共通していると考えられる。

日本のケーブル局が扱えるチャンネルはおよそ数十といわれており（業界関係者へのヒアリングによる）、選択してもらおうと 100 チャンネル近くがしのぎを削っている。競争に勝ち残るためには、たとえ実力派ニュース・チャンネルであろうとも英語だけのチャンネルでは弱く、二カ国語放送を拡大せざるを得ないようだ。多チャンネル化が進む中、二カ国語放送をきわめて戦略的にとらえているのである。

なお、NHK では、イラク戦争が始まった直後はニュースをすべてリアルタイムで同時通訳により伝えたが、状況が刻々と変化する事態が収まると、時差通訳体制に戻っている。NHK では基本的に大統領の就任式といった重要なイベント、外国人を迎える対談および戦争や大地震などの突発的な大事件・大事故の三つの場合のみ同時通訳を使うことにしている（BS 放送通訳グループ 1998）。いいかえれば、NHK では大ニュースの際は「速報性」を優先する方針だが、日常的には、時間をかけて初めて実現する「自然な日本語」を優先する方針をとるといわれている（木佐 1993）。

5.3 CNN 放送同時通訳の現状

イラク戦争の開始時期と重なる 2003 年 3 月から日本向けの特別編成チャンネルである CNNj が開始された。CNNj は、これまで CNN チャンネルで放送してきた国際放送「CNN インターナショナル」に加えて、米国内向け放送「CNN U.S.」および金融・ビジネスニュース専門の「CNNfn」の 3 つのチャンネルから日本向けに独自編成したチャンネルである。

CNN の米国内ニュースが加わることで、視聴者が多種多様な番組を享受できるというメリットがある一方で、同時通訳者にとっては、「平均的」アメリカ人以上に米国内のニュースに精通する必要に迫られることとなった。

2003 年 1 月現在、CNN の同時通訳は、およそ 40 人からなる通訳者が、基本的に 2 人で 3 時間ずつ担当する体制となっている。二カ国語放送の放送時間は、前述のとおり、2003 年 9 月の時点で午前 7 時から 25 時であり、週換算で 126 時間となっている。

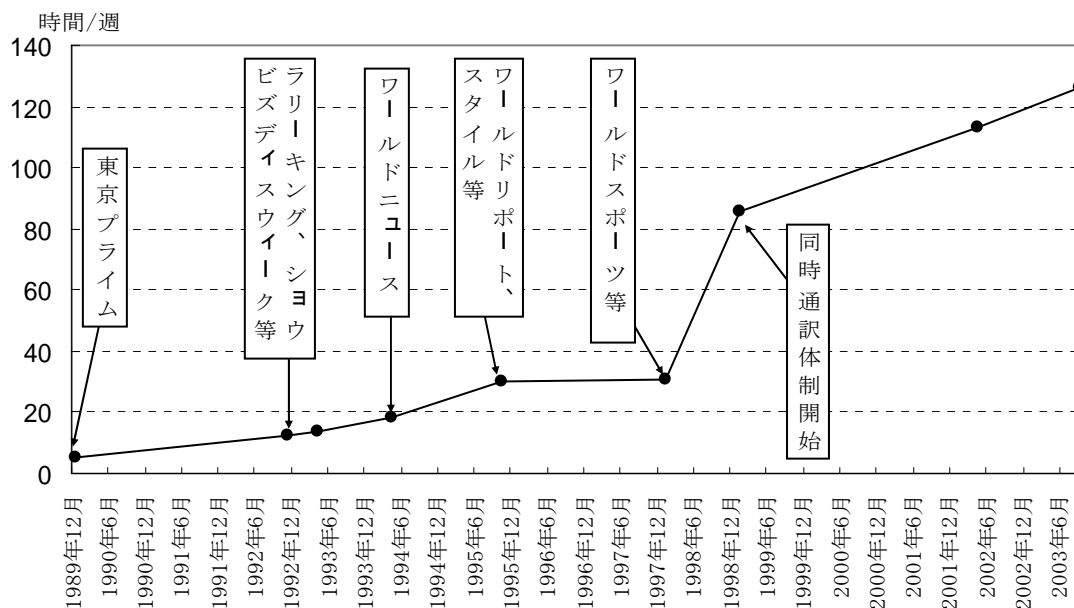
米国内外のニュース、経済、天気予報、スポーツなど、内容の濃いニュース番組を 30 分もの間、一人で同時通訳するのは、体力的にも精神的にも厳しい。たとえば、母語で番組をそのまま 30 分間シャドウイング（聞こえてきた音声をそのままオウムがえしに繰り返す手法）する場合でも、相当の体力を消耗するとともに集中力を要するという点については異論なかろう。また、30 分以上同時通訳すると能率が低下し、適切な訳語が瞬時に浮かばなくなるとの指摘もある（西山 1988）。

CNN の同時通訳現場では「限りなく時差通訳に近い同時通訳」が求められる。同時通訳で使う順送りの訳の多用は好まれない傾向にある。このため、瞬時に要点をまとめる能力を要求されている。この点、好例となるのが番組内で同時に二人以上が熱い討論を交わす場面に遭遇したときである。「クロスファイアー」（文字通り“一斉攻撃”や“激しいやりとり”が交わされる番組）などの討論番組を同時通訳する際、ど

の発言を訳出するのか、高度な編集能力が瞬時に求められる。

二カ国語放送の放送時間の推移、ならびにこれまでに論じてきた二カ国放送の変遷と放送通訳の訳出手法等についての分析結果を整理すると、以下の図および次ページの表のようになる。

図 CNN二カ国語放送枠の推移



(資料) JCTV の資料をもとに作成

6. おわりに

放送通訳とは、同時通訳であろうと時差通訳であろうと、極限的な状況で言語処理する訳出作業である（西村 1999）。他の通訳と比べて、放送通訳は精神的なプレッシャーがきついと思われる。放送通訳では、たとえ同時通訳であっても、きわめて専門的な内容を、放送ルールに則り瞬時に一般視聴者にとって平易な言葉に変えて訳出する必要がある。いかなる状況であれ「聞いてわかりやすい」通訳を心がけるしかない（Mizuno 1997）。一方聞き手は、放送通訳者に対して、以上の制約条件を意識せずに原稿を読むアナウンサーと同等のレベルの音声表現を要求する傾向にあるという点も重要であろう。朝日新聞に「まるで髪の毛先まで耳の神経が届いているように集中する」とも評されたCNN同時通訳は時差通訳と比べてかなり厳しい条件下でブースに入る。プレッシャーはとりわけ高いと考えられる。

本稿では、1984年からのようにCNN二カ国語放送が変化を遂げ、これに対応して放送通訳の内容がどのように変貌してきたかについて論じた。この分析を通じて、

表 二カ国語放送の変遷と放送通訳の訳出手法

	主な二カ国語放送と放送通訳の内容	訳出手法の形態	放送通訳の技法上の特徴・資質上の要素
草創期 (1984～ 89年)	テレビ朝日 ・「CNN デイウォッチ」 ・「CNN ヘッドライン」 ・放送通訳の形態 →原則：放送翻訳 例外：同時通訳	・放送翻訳は、全訳(word for word)を基本に、メモ取り形式の訳出、ウィスパリング・逐次通訳を併用 各手法の使い分けは、翻訳に利用可能な時間に基づく	・オリジナル(音声)に忠実な訳出を重視 ・放送翻訳者には、背景知識の豊富さ、サウンドバイトの細かい所まで聞き取るリスニング能力といった資質が必要【*1】
発展期 (1989～ 98年)	JCTV ・「CNN 東京プライム」 ・「ショウビズ・トゥデイ」 ・「ワールド・スポーツ」 ・放送通訳の形態 →原則：時差通訳 例外：同時通訳	・CNNの素材を一定の時間内に日本語に訳出し、主に生放送の本番中もしくは放送前の収録時に、素材に合わせてボイス・オーバーする ・訳出後にはデータベース化され、パソコンを用いて入力	・「視聴者に一番わかりやすいように」という点を特に重視(速報性が求められる場合は同時通訳で対応) ・時差通訳者には、前記*1に加えて、編集、情報の補足、音声表現の3点の資質が必要【*2】
成熟期 (1999年 以降)	JCTV ・「ワールド・ニュース」 ・「ラリー・キング・ライブ」 ・放送通訳の形態 →原則：同時通訳 cf. NHK では緊急時以外は時差通訳が原則	・ストレートニュースから多様な分野に同時通訳を導入 ・基本的に2人で3時間ずつ交代により担当する体制(生放送)	・速報性・効率性を重視 ・「平均的な米国人以上」に米国国内のニュースに精通することが必要 ・同時通訳者には、前記*2に加えて、瞬時かつ簡潔に要点をまとめる資質が必要

およそ20年にわたるCNN二カ国語放送において、以前にも増して、通訳者本来の領分からは少し踏み出した「ジャーナリスト(ジャーナリスティックなセンス)・編集者・アナウンサー」の3つの資質を兼ね備えた、新しいタイプの放送通訳者が求められるようになってきたことが明らかになった。

同時通訳については、ニュース番組の訳出のあり方が問われるなか、通訳者がどのような技法を身につけるのが実務的観点からも重要な研究テーマとなるものと推察される。この点は、前述した放送通訳者の資質に関するより詳細な分析にあわせ、筆者に課された今後の研究課題としたい。

放送通訳は、普段は「縁の下の力持ち」であるものの、1986年のスペースシャトル爆発事故、1989年の天安門事件、1991年の湾岸戦争、2001年9月11日の同時多発テロ、そして2003年のイラク戦争と、不幸な事故や事件が地球上で起きると注目される傾向にある。今後とも、このような注目と期待に応えられるよう、個々の放送通訳者の一層の資質向上が求められる。

謝辞：本稿を執筆するに当たっては、当時そして現在の関係者にご協力をいただいた。ここで謝意を申し上げるとともに、本稿に含まれる全ての誤りの責任は筆者にあることをお断りしておきたい。

著者紹介： 稲生衣代 (INO Kinuyo Yoshida) 通訳者、青山学院大学講師 (非常勤)。タフツ大学フレッチャー・スクール法律外交大学院修了。CNN、NHK 等の放送通訳を中心に、およそ 20 年にわたり通訳者・翻訳者として活動するかたわら、通訳学校において指導にあたり、現在に至る。この間、テレビ朝日や CNN でニュース・キャスターも務める。

【参考文献】

- AOL Time Warner 2003 Fact Book (Online) http://www.aoltime Warner.com/corporate_information/index.adp (2003.9.10 取得)
- Baylis, P. (2003). CNN revamps content to bring live U.S. programs to local market. *International Herald Tribune/The Asahi Shimbun*. July 12-13, 2003.
- Bibb, P. (1996). *Ted Turner: It Ain't As Easy as It Looks: A Biography*. London: Virgin Books. (邦訳『テッド・ターナー—CNNを創った男』久坂翠訳/アスキー)
- Gilboa, E. (2002). The Global News Networks and U.S. Policymaking in Defense and Foreign Affairs. The Shorenstein Center on the Press, Politics and Public Policy, Kennedy School of Government, Harvard University. Research paper #2002-6.
- Kurz, I. (1982). Interpreting for Mass Media. In Bühler H., Kurz I. & Bowen M. (eds.), *Interpretation and Nonverbal Communication. Report on the Georgetown University Round Table*. Washington DC: Georgetown University, NRCTI outreach paper. pp. 4-6.
- Kurz, I. (1990). Overcoming Language Barriers in European Television. In Bowen D. & Bowen M. (eds.), *Interpreting - Yesterday, Today, and Tomorrow*. American Translators Association Scholarly Monograph Series, Volume IV. pp. 168-175.
- Kurz, I. (1997). Getting the Message Across - Simultaneous Interpreting for the Media. In Snell-Hornby M., Jettmarova Z. & Kaindl K. (eds.), *Translation as Intercultural Communication*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Livingston, S. (1997). Beyond the "CNN Effect": The Media-Foreign Policy Dynamic. In Norris, P. (ed), *Politics and the Press: The News Media and their Influences*. Boulder: Lynne Rienner Publishers. pp. 291-306.
- Mizuno, A. (1997). Broadcast interpreting in Japan. Some theoretical and practical aspect. In Gambier, Y., Gile D. & Taylor, C. (eds.), *Conference Interpreting: Current Trends in Research*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.192-194.
- Neuman, J. (1996). *Lights, Camera, War: Is Media Technology Driving International Politics?* New York: St. Martin's Press. pp. 203-225.

- Phelan, M. (2001). *The Interpreter's Resource*. New York: Multilingual Matters.
- Viaggio, S. (2001). Simultaneous interpreting for Television and Other Media: Translation Doubly Constrained. In Gambier, Y. & Gottlieb, H. (eds.), *(Multi) Media Translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp. 23-35.
- Walsh, K. (1996). *Feeding the Beast; The White House versus the Press*. New York: Random House.
- 天野昭 (1996) 「活写されたメディア王の人生劇場」 Porter, B. 著・久坂翠訳『テッド・ターナー CNN を創った男』アスキー pp. 409-413.
- 小倉慶郎・三島篤志 (1999) 「放送通訳をめぐる諸問題」『The JASEC Bulletin』第 8 巻第 1 号 pp. 1-10.
- 貝瀬千章 (1993) 「放送英語ニュース上の諸問題」『明海大学外国語学部論集』第 6 集 pp. 31-42.
- 川田尚市 (1998) 「ビジネスマンの役に立つ衛星放送ニュース番組ガイド」『プレジデント』1998 年 4 月号
- 木佐敬久 (1993) 「同時通訳の日本語 視聴者はどう受けとめているか」『放送研究と調査』1993 年 3 月 pp. 28-39.
- クラウス・エリス・S. (1995) 「テレビ・ニュースの多様性—日米の相手国報道の解釈」『放送研究と調査』1995 年 12 月 pp. 20-31.
- 久和ひとみ (1989) 『私はニュースキャスター』岩波書店
- 柴原智幸 (2003) 「放送通訳者のアイデンティティ・クライシス」日本通訳学会第 8 回通訳教育分科会報告
- 鶴田知佳子 (1997) 「英語テレビニュースの放送通訳—ある ABC ニュースに関する一考察」『目白学園女子短期大学研究紀要』第 34 号 pp. 115-133.
- 西村友美 (1999) 「時差通訳のストラテジーと言語認知」『京都橘女子大学研究紀要』第 26 号 pp. 69-84.
- 羽毛田弘志 (1999) 「世界のニュースを日本語に」『朝日新聞』(夕刊) 1999 年 1 月 25 日
- BS 放送通訳グループ (1998) 『放送通訳の世界』アルク新書 8
- ピンカートン・ヨウコ (1996) 「通訳者には編集が許れるか—日本とオーストラリアの通訳原理の比較」『通訳理論研究』第 6 巻 2 号 pp. 4-15.
- 三島篤志・小倉慶郎 (2000) 「放送通訳の訳出ストラテジー」『The JASEC Bulletin』第 9 巻第 1 号 pp. 18-30.
- 西山千 (1988) 『英語の通訳』サイマル出版会
- 川田尚市 (1998) 「ビジネスマンの役に立つ衛星放送ニュース番組ガイド」『プレジデント』1998 年 4 月号
- 以上のほか、JCTV のホームページなど